の果実

—異色中編集—

宇能鴻一郎

学研版

快楽の果実

＜検印省略＞

定価四二〇円

昭和四四年五月一五日印刷
昭和四四年五月二〇日発行
著者／宇能鴻一郎
発行者／古岡秀人
発行所／学習研究社
〒一四五／東京都大田区上池台四—四〇—五
電話／東京（七二〇）一一一一（代）
振替口座／東京一四二九三〇
印刷所／株式会社暁印刷
製本所／株式会社国宝社
品名番号／G四六五—四〇一
（乱丁本・落丁本はお取替えいたします。）

© K. Uno 1969 Printed in Japan.

目次

指の逸楽……三
情人教育……六三
女神カーリーの誘惑……一〇一
牙ある虹……一四三

裝

幀

山

下

菊

二

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

指の逸楽

1

無芸大食、という言葉がある。けれども栗村の場合は、大食がりっぱに芸として通用するのである。

むろんガルガンチュアもどきに、豚の丸焼きを十頭も平らげるほどの、超自然的な胃袋を持ち合わせているわけではない。一度に食べた量の記録としては、学生時代に、同人雑誌の先輩の家をたずね、鶏の水炊き八人前をほとんど一人で平らげ、ウイスキイの角瓶一本をあけ、あまつさえ飯びつをすっかり空にして、夫人にあわてて追加を買いに走らしめた、というていどである。

この記録にしろ、実はある心理的な動機があって、そのはずみに偶然達成されたので、そうそうたやすく更新できるものではない。

その要因とはつまり、栗村は先輩の家に別の先輩に連れられて、おそるおそる顔を出したのだが、彼が来ることは向うでは予定していなかったらしい。率直な先輩夫人は、

「あら、栗村さんは、何で来たの？」

と聞き、その一言が、外見に似ず感じやすい栗村の心に、ぐさりと突き刺さったのである。

（ああ、おれは余計ものだ）と栗村は悲しみとともに考えた。（ここでうまそうな匂いを立て、ぐつぐつ煮えている鶏肉や野菜は、おれのために用意されたものではなかったのだ。おれはやっぱり、寒いアパートへ帰って、学生食堂で冷たいA定食を食べているべきだったのだ。こんな明るい、逸楽的な、豪勢な食卓は、しょせんおれに開かれてはいなかったのだ）

とはいえ、栗村のためにも箸と取り皿は用意された。先輩たちはもっぱら飲んでいて、鍋の方にはあまり手がのびなかった。むずかしい文学論の会話にも加われぬまま、栗村は一人で食べはじめたのだが、するととつぜん、ここは食べに食べ、飲みに飲み、鍋も飯びつもウイスキイ瓶もすっかり空にしてみせなければ、先輩とその夫人に対して悪いような気がしたのである。

自分は招かれざる客なのだから、せめて大食ぶりを披露して、おどろかせ、面白がらせてやらなければ、というサーヴィス心もあった。しかし何よりも今は、ひたすら食べ、かつ飲みつづけていなければ、このバツの悪さ、内心の悲しみの鋭さを、とうていまぎらわせないように、栗村は感じていたのだった。

というわけで、間のもてぬとき、悲しいときには、栗村はもっぱら大食をする。快適なとき、嬉しいときはどうかというと、いっそう大食になる。さいきんの記録では、ある夜の会合で偶然、栗村は前からあこがれていた若い女優に会ったのだが、どういう気まぐれからか女優は大変彼に親しみをみせ、よりそってお酌までしてくれた。

有頂天になった栗村が、六人前のすき焼きをほとんど一人で食べてしまったのはいうまでもないが、そのあと会合の場所をさりがたくて銀座をうろついているうちに、小ぎたない店から天ぷらをあげる、胡麻油の焦げた、香ばしい匂いが漂ってきた。反射的に栗村はのれんをわけてとびこみ、

浮き浮きした声で、

「テンドン一つ」

と注文した。これは嬉しさのあまり満腹を忘れていたせいもあるが、もっと理屈をつけるならば、好意を示されたとはいえ女優との対談が、やっぱり対談だけで終ったことに、心中では淡い空虚感を覚えていて、その空虚をせめて食物でなりと充塡(じゅうてん)したかったからであろう。

さて、運ばれてきた天丼が、安直な店の構えに似ず、明るい金色のパリパリする衣のあいだから、赤い縞の見える、まさに本ものの、車海老の揚げたてをのせていた。(ありふれた大正海老ではなかった!)熱い飯も一粒一粒、お尻をぴんと空に立てているほどに硬く、よく炊けており、その粒のあいだに油と醤油の混ったタレがほどよく沁みこんでいて、まず衣のはしをちぎって飯とともに口に運んだ瞬間、栗村は感動に、背筋が震えるのを感じたのである。

大ぶりの湯のみに満たされた熱い番茶で、口中の油を洗い、こんどは白い、ぷりぷりした海老に箸をつける。うまい。箸はいっそう早くなり……たちまち栗村は、心中に残っていた、漠とした空虚感を忘れはてた。

まだ帰るのが惜しくて、近くのクラブに入った。止せばいいのにホステスたちに、たったいま食べてきた天丼のうまさについて、長々と講釈してしまった。するとホステスたちも食欲をそそられたらしく、

「じゃ、お店が終ったら連れてってよ。そうして時間つぶした方が車ひろいやすいし」

とせがまれて、誰からもさそわれなかった売れ残りホステスばかり数人連れて、また引き返す羽目になった。

そしてホステスたちが、嬉々として天丼にとりくむさまを見ていると、これがいかにも美味しそうである。(しかしおれは、天丼は食べたが、天ぷらそのものはまだためしていない。こんどはキスやハゼの、カリッと揚ったやつで、ビールをキュウッと流しこんだら、また違った快楽があるだろうなあ)

そう考えるとたちまち、さらに食べつづけるべき正当なる理由が生じたような気がして、栗村は嬉しげに頬をゆるめ、

「ビールうんと冷たいの。それから一通り揚げてくれ」

と叫んでいたのである。

はたして、何なく胃におさまった。夜半に自宅に帰り、冷蔵庫からメロンを一個出して、口直しに食べ、さいごに白菜の漬物を一鉢、お茶うけにして終った。

食べかたは、これは少し変っているかもしれない。といってガラスを食べて火を吐いたり、尻から食事をとって口から排泄したりの、特殊なテクニックを持ち合わせているわけではない。ただ、栗村の食事を見た人は誰でも、彼が実に美味しそうに食べている、といって感心する。大きく口を動かし、しゃべり、飲み、笑い、一刻も箸をやすめず、要するに、いかにもダイナミックな食べかたなのである。いかにも、大量を、熱心に、鑑賞し、陶酔しつつ食べている、という印象がある。

先に大食が芸として通用する、といったのは、実は栗村の職業のことである。もともと栗村は文芸評論家としてデビュウしたのだが、生れつき攻撃精神が欠けているせいか、どうも書くものの切れ味が鈍かった。一方彼が心そこから鑑賞し耽溺(たんでき)し讃美できる、肉感的な美しさを持った小説には

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

めったに出会わず、しぜんと商売が先細りになってしまった。そのうちに或るＰＲ雑誌に書いた食べ物エッセイが、小説を批評するときとはくらべものにならぬ、情熱と対象への陶酔にあふれている、ということで評判になり、連載を頼まれ、婦人雑誌や旅行雑誌にも書き、いつか食味評論家、という肩書きがついてしまったのである。

そうなりきってみると、これは意外にいい商売だった。なにしろ只で食事ができる。取材費をもらって旅行ができる。原稿料は高くはないが、週刊誌の食味コメント、ラジオ、テレヴィの出演料で、馬鹿にならない収入がある。

外形も、文芸評論家などといういかめしい肩書きより、食味評論家の方が、どうも彼には似つかわしいらしい。中背だが色白で、たっぷり肉がつき、腹などつまむと、大日本国語辞典ぐらいの厚さがある。頬はたるみ、厚い唇を、よだれを垂らさんばかりに曲げて、嬉しそうに食べ物の話をはじめると、二時間でも三時間でも種はつきない。

ただ一つの心配は、健康のことである。かかりつけの医師からすすめられて、病院で健康診断を受けたところ、血液中のコレステロールが健康体の三倍ちかい、と言われた。血圧が高く、心臓は肥大ぎみで冠動脈に異常があった。糖尿のないのだけが救いだったが、それでも体重を即刻、半分に減らさないと、いずれは危くなるかもしれない、とおどかされた。

しかし困ったことに、栗村は体質的に、料理のなかに少なくとも一品は、ギトギトと脂ぎった、あとで何杯水を飲んでも口中がヌラヌラするような、味の濃いものを食わないと、「食事をした」という実感が湧かないのである。

肥るから止めねばいけない、とは思いながらも、三日もこうしたものを食わないと、何とない欲

求不満に落ち入り、気分は苛立ち、怒りっぽくなる。そうしたときにたまたま、濃厚な肉と脂のかたまりを出されると、生唾が湧き、眼が輝き、仕事のことも忘れはてて、ひたすらむしゃぶりつきたくなる。あたかも好物を前に尻を高くし、尻尾をゆすり、軽くうなって飛びつこうとしている猫とおなじことで、こうした無我の瞬間に止めだてでもされると、いかに攻撃精神を欠いている栗村といえども、反射的に妨害者の喉笛に食いつきかねないのである。

2

このように大食であり、その結果として風呂で体も洗いにくいほどの肥満体であることと、栗村のもう一つの、性のときの奇妙な好みは、あるいは関係があるのかもしれない。

たいていの男が女とベッドをともにするときの欲望は、

(彼女を裸にし、ベッドに押し伏せ、白いつやつやした腿を開かせ、あえかな桃色の、匂いのいい濡れた部分に、むりやり……)

と言ったものであろう。

しかし栗村の場合はちがう。ほとんどの男とおなじく栗村も美人が好きだが、栗村にとって何よりの美人の条件とは、まず手と指が美しいことである。ほっそりしていて、しなやかで、よく反って、関節が細く、肌がなめらかな手の持主でなければならない。男の手で一握りにでき、しかもひんやりとしていてほしい。器用で、こまかく、たえず表情ゆたかに、よく動く必要がある。爪はあまり長すぎず、しかし痛そうに砥ぎあげられていて……。

こんな手に、栗村は、自分を握りしめてほしいのである。自分の収縮した肉体に、その指がまと

いつき、優しく愛撫し、爪を立て、そそり立たせ、そのままさいごまで、容赦なく進んでいってほしいのである。

それが栗村には、何よりの快楽に思われる。ふつうの男性が熾烈に望む、白い腿の奥の、桃色のあえかな濡れた部分も、むろん嫌いではないけれども、自分の醜怪なものをそのなかに侵入させるのは、何だか申し訳ない、悪いことのような気がするのである。

しかも、そうしたふつうの方法だと、やはり多少は動き、面倒な姿勢もとらねばならない。極度の肥満のために、栗村は実は、それが苦しい。しばらくつづけると、息切れがし、目はくらみ、全身に汗がふきだし、顔は青ざめ、心臓はすさまじく踊って、胸をつきやぶりそうになる。とても、悦びどころではない。

その苦しみから逃がれるために、どうしても栗村は、早く切りあげることになる。それでは相手の女は不満だろうし、女の不満は聞かなければそれでいいとしても、自分も満ちたりた気持にはなれない。それよりのびのびと寝ころがって、女の美しい手に思うさまもてあそばれている方が、楽だし、怠けていられるし、あの、女性のもっとも神聖な宮居に土足で踏みこむような、〝申し訳ない〟感じを、味わわずにすむのである。

（これこそ賢者の快楽だ）と、栗村はひそかに、満悦して考えることがある。（むろんこの方法だと、悪疾をうつされる恐れもなく、妊娠を口実にゆすられる心配もない。途中で怖いお兄さんが出てきたって、もてあそばれているのはこちらなのだから、インネンもつけにくいだろう。しかも、あまり相手と慣れ慣れしくなることもなく、理想的な距離を保っていられる。これに反して、ひたすら女性の、太腿のあいだを追っかけている連中は、いわば愚者の快楽を求めているのだ。哀れな

連中だよ。まったく）

もっとも栗村の悩みは、たいていの女性がさいごまでこの奉仕をすることを好まず、彼が勢いづくと、身ぶりでなんとなく、おのが肉体に迎え入れたげなそぶりを示すことである。むげに拒んでばかりはいられぬので、いやいやながら、おずおずと栗村は義務を果たしにかかるのだが、その熱意のなさはあまりにも露骨であり、女は彼の身勝手ぶりにあきれはてて、いつかしぜんに別れて行くことになるのである。

知っている女の誰それが、友人の誰かとベッドを共にした、と聞いても、栗村はそれほど嫉妬は感じない。けれども、いつか知り合いの編集者の、結婚式に列席して、栗村はある若い、女流作家と並ばされたことがあった。

大柄な美人だという評判の女流作家で、たしかに顔立ちはととのってはいたが、雰囲気にはやはり物書き独特の妖気めいたものがあり、手ばなしで美しいとか、可愛いとか賞めるわけにはゆかなかった。しかし大きなダイヤモンドを光らせ、ナイフとフォークをあやつっている彼女の、手と指だけは文句なく美しかった。白く、水仕事などしたこともないようになめらかで、ほっそりと神経質で……。

女流作家の隣には、その夫の、中年の実業家も坐っていたが、横目でそれとなく二人を見較べているうちに、栗村はとつぜん、胸がしめつけられるような苦痛を感じた。その苦痛は、あきらかに嫉妬の感情だった。実業家の太く、黒々とした醜怪な肉体の部分に、彼女の魅力的な指がまといつき、からみつき、爪先でつつき、愛撫しているイメージが、とつぜん頭に浮かんだのである。

太い吐息をして、栗村は考えを逸らそうとつとめた。ベッドのなかで、実業家が女流作家の腿を

開かせ、上にのしかかっている図を、一所懸命に考えた。そのイメージは、いくらつとめてもぼんやりしていて、焦点を結ばなかった。それに反して、先の、巨木に絡みつく優しい白鳥のイメージは、すさまじい鮮明さで彼の目前に浮かんだまま、どうしても消えぬのだった。

少年のころに、これに似た記憶があった。

田舎の、漁港の近くで栗村は育った。しぜん友人には漁師の息子が多く、それも遠洋航海のカツオ、マグロ漁船に乗り組む父兄を持っているのが大部分だった。中学教師の一人息子の栗村とは、彼ら漁村の少年は肌合いがちがって、性的に露骨なことも、ためらわずに口にした。

仲良くしていた友人の一人が、中学生の彼に、港の堤防の上で小アジを釣っているときにささやいた。

「俺(おら)んちの兄(あん)ちゃんな、アフリカで、悪か病気ば貰うてしまよったっちゃが」

「ふうん」

「それでいま、船員保険病院に通いよんなるとじゃらえ」

「そいで、ええ」

「それで俺、思うんじゃっけど、あんな病気は、女医先生(しえんしえい)が診(み)てくれるんじゃっどかい?」

「知らん」

「んだこら、診てもらいよるときに、兄ちゃんがついよか気持になってしまよったっちゃが」

「うん、なあ」

「ほっじゃきい、兄ちゃんがピーンとなってしまよって、女医さんのピンセットを、ポーンと弾き飛ばしよらいたっと」

「ああ」
「それが女医先生の顔に当ってしまよったっと」
「あっきれた」
「ほっじゃきい、女医先生が『失礼なっ』言うて怒ってしまよって、もう診てくれんじゃった言うがねえ」
その女医は、東京から来ているという、すらりと背の高い、白衣の似合う女だった。その女がもし彼の兄の、逞しい青年漁夫の診察をしたとしても、そして若者がつい不本意に昂奮してしまった、というまではせいぜい事実としても、それがピンセットを弾き飛ばす、ということは、現実には考えられなかった。いわんやそれが女医の顔に命中し、怒らせてしまう、などということは、あるはずがなかった。
おそらく美人女医に関心を持っている青年漁師たちの、それは作り話だった。海の男が居酒屋で潮焼けした大声で交わすにふさわしい、快活な法螺だった。それに気づいたのは後年のことで、少年の頭にその物語はふしぎな鮮明さで刻みこまれた。鮮明である以上、その物語は現実感があった。
美人女医の優しい手のなかで、不本意に、むくむくと身をもたげだした逞しいそのもの。おどろきあきれている美しい顔に、みごと命中したピンセット。青年漁夫の恐縮。自尊心の強い美人女医の怒り顔……その怒りのさまを想像するのは、少年たちに奇妙に楽しかった。おそらくその楽しみは、栗村ばかりではなかった。熱い堤防の上で、相手の少年も昂奮して、二度も三度もおなじ話をくりかえすのだった。
吐息をついて、少年の栗村は水平線に目をやった。防波堤の向うには南国の海がひろがり、愁い

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.